
君は人で、私は人？

雪と空とたい焼き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は人で、私は人？

【Nコード】

N3330U

【作者名】

雪と空とたい焼き

【あらすじ】

私はどうすれば良いの？

戦えば良いの？

死ねば良いの？

…まだ死ぬ訳にはいかない、絶対に生き延びる…

たとえば、人を殺しても。

少女が親友と一緒にゾンビと戦っていく話です

第一話：夢オチで正夢で何をすればいいのかわかんなくて（前書き）

残酷描写に、ほんの少しムフフがあります。

苦手な人は読まない方が良いかもしれませんね。

Hな事はライトに…静かに…だけどそれでい（殴

駄文です。

第一話：夢オチで正夢で何をすればいいのか分かんなくて

カリカリ…

「美咲さん、ここってどうやるの？」

「…ここは、この式をこう変換させて…素数を考えてここに当てはまるのを考えたと楽…」

隣の席の四葉よつば 湧也ゆうやが数学を聞いて来た。

いつもの事…これが私はとても好き、とても自由でゆっくりと平和な時間が流れるのが。

「おお…そか…えっ？」

「消しゴムで消さない方が良いと思う…」

自分でわざわざ困ることに陥れる人はこの人ぐらい…今日で4回目…

「こう…素数の考え方は慣れしかない…」

「おお、おおー」

少し変わってる人だ。

…先生がこつちを見ているけど、どうしよう。

「そうだな、四葉！これ、解いて見る」

先生の方が早かった…。

「えっ！？あ…はい」

…10秒経過…教えた方が良いのかな。

「湧也…」

「美咲さん、教えるのは彼のためにならないよ」

「そう…」

ちよこつと残念な気がするのは気のせいかな。

「はい、立ってなさい」

…今度休み時間にでも教えようかな…？

「はい、橘君」

「 $f(x) = (1 \ln x) / \text{です}\text{ので} x \text{で微分すると、} f'(x) = (1 - \ln x) /$ 」

「完璧ですね」

「すごいなあ…」

…教えよう。

「湧也」

「わあ！なんだ美咲さんか」

「数学…良かったら教える」

嫌がられるかな、気取ってるように思われるのは嫌だな…。

「おお、それは真にありがとうございます」

「…どうしたの」

たまに喋り方が変わるけど、おどけてるのかな。

「なんとなく、とりあえず因数分解と√の解き方と $e^{\wedge}m$ と π の大小の解き方お願いします」

あ、今はお昼だったかな。

「その前にお昼だった」

「一緒に食べる？」

「うん（コクリ）」

ガチャガタ…タタタガタ（机を動かす音

「あ、美咲さん！僕たちと食べない？」

たちはな
橘 いっき一樹が読んで来た。

私が返答に困っていると、湧也は

「どうぞ、違う人と食べるね、後で数学教えてねー」

そう言って笑いながら歩いて行って違う女の人が声を掛けて机を合わせた。

…ちよつとだけ、悲しいかもしれない。

私は、机を橘君たちのグループに机を合わせた。

「美咲さんは、湧也君になんで数学を教えるんだい？」

意味が分からない。

「彼のためにならないよ？」

そう思うのかな、普通の人は。

「でも…教える…」

「なぜ？」

「しつこい人は苦手…」

「分からない」

こんな風に過ごす時間は苦手、平和だけど疲れてしまう。

勇也…忘れてるかな…。

「美咲さん」

「…湧也…」

居た、なんとなく…嬉しい。

「さあ、教えてもらおう」

10分だけだけど、教えてあげた…お昼とは比べ物にならないくらい楽しかった。

予鈴がなった、次の授業の用意をして先生が来るのを待つ。

「勇也は、得意不得意の差が激しい…」

「アハハ、よく言われるよ」

彼は、国語と社会が得意…文系とでも言うのかな。

「でも、美咲さんだって無いの？」

分からない、正直に言えば何が得意で不得意なのか自分で分からない。

「ま、学年1位の人に言ってもあんま気にならなさそうだけどね」
笑いながら喋ってくれる。

でも学年1位と言う肩書きは好きじゃない、むしろ嫌い。

それで、近づいてくる人が居る…頭が良いとか…それってどうでも良いことじゃないの？

「…無い、勉強は嫌い」

「それでここまで勉強が出来るなんてすごいなあ」

…良い事なのかな。

「勉強が出来るのは良い事ですすごい事なの？」

「うん、僕はすごいと思うよ」

そうなのかなあ…

「勉強が出来たら、その人を湧也は好きになる？」

なんとなく、本当に無意識になんとか聞いてみる。

「それは…無いかな」

「なぜ？」

「だって、勉強が出来るからって、その人は頭が良いのをコンプレックスかも知れない」

…

「勉強が出来るからって、人生が楽しいわけじゃない」

「湧也は…相手の事が先なんだね…？」

好きになるかを聞いたのに彼は、相手の事が先になってる。

「確かに、仕事は見つかるし…お金目当てで来る人もくるかもしれないけど」

「僕は好きにはならない、僕は相手が幸福なら好きになるかもしれないけどね」

彼は笑って、そう言って見せた。

「HRだね」

「うん…」

私は席を、元に戻した。

HR中に、一番後ろで窓際の席に座ってた私は窓から校門を見た。

「何…あれ…」

驚きを隠せなかった。

それは…湧也の家に遊びに行った時に遊んだゲームに出て来た人間だった。

いや、あれは人間なんてものではなかった…

名前は、ゾンビだった。

あの動き、そして横腹から出ている内臓…見た目は、ゾンビだった。

「それじゃあHRは終わりだ、かいさーん」

先生がそう言った瞬間に私は湧也を呼んだ。

「湧也…あれ…！あれ！」

「どうしたの？美咲さん、そんなに血相をかえ…」

勇也がその光景を見た瞬間に、顔色を蒼くした。

でも、すぐに顔色は元に戻った。

「映画でも、とってるんじゃないか？」

「でも、あれは…」

内臓が出ていると言おうとした瞬間に、放送の入る音が鳴った。

「ただいま！校内に不審者が発生！不審者が発生しました！未だH
Rを終わってないクラスも速やかにご帰宅ください！」

「…湧也…」

「美咲、行くぞ」

声色と、口調を変えた…勇也は、学校では口調を変えて穏便で居ると言っていたのに。

「勇也、良いの？」

「口調かな？」

別に気にしてないと言う顔をしていた。

「湧也が良いなら良いけど…普通に帰るの？」

どうしようか、見間違いないならそれで良いし、本当なら夢だ…勇也の
家でゲームをやりすぎた…かも。

「さあ？夢だとい…」

また放送が入る音がした。

「うわああああ…来るな！来るなあ！やめ…痛い！痛い！やめ
ええ…」

「美咲、みんながパニックなる前に帰るぞ」

適当…すぎる？

走って、20秒後には悲鳴が聞こえて…それから5秒後にみんなの
足音が聞こえた。

でも、もう良かった…二階が教室の私たち三年生はすぐに靴棚に行けた。

「ほら、急げ」

「ちよつと…待って…」

靴が履けたと同時に後ろから人が見えた。

とにかく走った。

が、時すでに遅かった。

「おいおい…これはピンチか…？」

「向こうの校門から出れば…良いと思うよ」
遠回りになるがこの際しようがない。

あ…ゾンビ…

あ…噛まれた…。

いた…い…。

「つていう夢を見た…」

泊まりに行った幼馴染の湧也に話す。

「縁起でもねえな！あと所々喋り方違うぞ！」

夢なのに…。

「夢だから、そんなもん…じゃないのかな」

「ゲームやりすぎ、しかもなんか本当にある所まであるし」
目の前にあるパンにバターを塗る。

「私の家にゲームは無いし、親はゲームを買わない…」

パンに噛り付く、ゲームが出来ないのは残念…。

「もう湧也の家に来る必要は無くなった、数学はもう教えない」

「すいませんでした、ごめんなさい、ゲームやらせます」

時計をちらりと見てみる。

「8時…12分…」

「えっ」

どう考えても、20分は掛かる。

「遅刻？」

「…湧也のせい…」

パン焼くのが遅い。

「俺かよ！早く行くぞ！パン食ってる場合か！」

もったいない…あとで食べよう…かな？固くなりすぎてなければ。

廊下を歩いて、ドアを開けて、湧也がカギを閉めている間に自転車の後ろに乗る。

「よし、行くか」

ただ無言で首を縦に振った。

「よっ」

自転車のペダルを漕ぐのに立って漕いで力を入れる湧也。

「美咲…」

呼んで来た、とにかく急いでほしい。

「お前、重いよ」

ドゴオ

脊柱の上の方を殴ってやった。

「冗談だ、痛い、シャレにならん」

「冗談でも…ひどい…」

本当だったら…。

「そう、シヨンボリすんな」

湧也のせいなのに。

ちょうど学校まで半分ぐらいになった時に湧也が口を開いた。

「美咲、お前の夢が正夢じゃないのを願うよ」

いきなりどうしたのかな…

「とりあえず、お前の夢で俺の性格と口調が面白いぐらい改変され

てたのは許そう」

「どうしたの…」

湧也に回していた腕に力を籠める。

「あれは…なんだ…？」

自転車が止まった。

私は、ゆっくり降りる…湧也が冗談でしたと言っのを信じて。

「嫌だ…」

目の前に居たのは、夢で見た姿形がそっくりのゾンビだった。

「やばいやばい！どうする！嘘だろ！冗談だろ！」

ゾンビがこっちに気付いた。

「うるさい！黙って！」

つい、声を張り上げてしまった。

湧也も私が声を荒げたのに驚いたのか、静かにした。

「静かに…歩いて…」

湧也の腕を掴んで歩く。

「ああ…」

ゾンビは、私たち横を通り過ぎた。

私たちは、歩いた…静かに…人気の少ない所に。

「ここまで…で良いのかな…」

緊張感から解放される。

「美咲…お前！すごいな！」

意味が分からなかった、とても怖かったしとても焦ったのに。

「何が…？」

「すごいんだよ！ゾンビを目の前にしてパニックを起こさなかったなんて！」

すごいのか…？

「夢見たからじゃないの？だから事前に余裕があって落ち着いてた」

「そっか…そんな風に思うか、でもすごい事だ！お前のおかげで俺は死なずにすんだのかもしれない」

なんかどうでも良くなってきた。

「静かに…ゾンビが来るかもしれない」

「分かった…あと、一つ言いたいことがあるんだ」

どうしたのかな…？

「ゾンビは多分俺のゲームの種類だ、耳が聞こえて…つつかめちゃめちゃ聞こえる代わりに目が見えない」

そうだと思う。

「多分…この後はどうする？」

特にやる事が浮かばない、だって実感が湧かない。

「どうするって…俺らは家族なんていないし…、家に行く必要もないしな…」

死にたくない、それしか湧かない、気持ちだ。

「…うう…ダメだ…頭が破裂しそうだ…なんだ…これ…」
どうしようも出来ない…。

何をどうして、どうやって、何のために、今やるべきことは…。

「とりあえず…」

湧也がこつちに顔を向ける。

「漫画みたいに、助けよう…？」

「人をか…？」

無言で、頷いて見せた。

「逃げて、どこかの軍隊にでも保護してもらおう…？」

「…考えが楽すぎるよ」
でも、

「そうしないと、生きていけないじゃない…？」

湧也は笑って見せて。

「ああ、学校に…向かおうか」

私は、すぐそばにあった石を拾う。

何個も何個も。

「どうすんだ？それ」

…やっぱり、馬鹿だ…そこは夢でも変わらなかった。

「おい、顔がやっぱこいつ馬鹿だって顔してんぞ」

「っ…自転車で移動して、近くに寄って来たゾンビを音で離れさせる」

気づかれた、読心術でもやってたっけ…。

「そっか…なんか、夢見てるみたいだな」

それは、同意できる。

何すれば良いのか分かんない。

だから、漫画やゲーム、映画のように行動してみる。

湧也の持ってた物だけど…みんな…死んでたような…。

「ほら、行くぞ」

「うん」

私は、まだ大丈夫だと、何もわかんなくても良いと思って…また動いた。

第一話：夢オチで正夢で何をすればいいのかわかんなくて（後書き）

駄文です、つまんなかったですかね。

ゾンビ物が人気だからって書いてんじゃねーよ

とか言わないでください（笑）

現実でもゾンビ物二本書いてた変態です。

下手でしたかね。これから本当の始まりです。

第二話：やる事を、見つけた…小さな事だけど。（前書き）

特に無いんですが、こっちが書いてるみんなに振り回されそうです。

もうちょっと考えを練った方が良さのかな。

（キャラ紹介）

鳴宮 美咲

年齢 17歳 高校二年生

B 74

W 52

H 76

身長 165cm

体重 46kg

華奢な体つきをしているが、あまり貧弱ではない。
剣道と弓道の有段者。

落ち着いた行動が、普通の人では考えられないほど取れる。

髪の毛は腰に当たるほど長く、少しパーマが掛かっている。（天然パーマ）

目は目尻が下がった、たれ目で顔はちっこい。

4歳からの記憶がない。

第二話：やる事を、見つけた…小さな事だけど。

けっこのような数のゾンビが沢山いる…

「そろそろ…学校…？」

湧也に聞くと無言で頷いてきた。

声を出すわけにはいかない。

ゾンビはちよつとした音でさえ寄ってくる事が分かった。

走ったりする事に比べれば今乗っている自転車のほうが都合が良い。そして持っている石で寄ってきたゾンビは離れさせる。

これが今の行動内容…。

「もう良いぞ、降りてくれ」

「分かった…」

何すれば良いのか分かんないし、武器なんかもちろんない。

ゲームの世界とは全然違うけど、私や…湧也はこの世界を楽しんでいるのかもしれない…。

歩く…静かに…そして、見た光景は…

あまりにも普通すぎた。

…キンコンカンコン…

チャイムが鳴ってしまった。

「ゾンビがたっぷり来るぜ…」

…それには同意できる…。

元々運動場にはゾンビが数体だが居た…。

今のチャイムは、とても響いて…そして音が強くて…ゾンビが来る格好の的でもある…。

「中に入ろう…知らない奴も居るかもしれない」

ゾンビが居ることを知らない人…？

二階まで土足で駆け上がる。

いつもの廊下、いつもの教室。

私は、ドアを開けた。

「おい、お前ら！遅刻だ、しかもなんだ！鳴宮に限っては石まで持ち寄って！」

…何…これ…。

「んだよ…普通じゃないか…」

なんで気が付いてないの…？

みんなは私たちを見ている。

それもそうかもしれない、石を持って、あまり遅刻をしない私が遅刻をして、そして土足…。

「湧也…」

何をすればいいかまったく考えてなかった。

「お前ら！土足で教室に入ってきておって！何を考えとるんだ！」

「うるせえ！」

湧也が怒った、ちょっとだけ怖くて…驚いた。

先生は黙った…いきなりこんな格好で学校に来たあげく怒るなんて普通の人じゃありえないのかな。

「先生！みんな！分かんないのか！」

私は、やっと気が付いた…救急車の鳴り響く音が止まってない事に。

「この救急車の数！そして外を歩き回っている人間！」

「君たちもそう思ったのか」

反応したのは、典型的なオタクの彼…名前^{みさか}はたしか…美坂^{たきや} 滝也…だったかな。

「美坂…」

「ゾンビにしか見えないんだがどういう事かな…？」

彼は分かっていたようだ、ゲームが好きなのだろうか…？

とにかく、この状況で戦い方と敵の行方が分かってない人は……いない。

「美坂！お前どんなのが分かってんだな！？」

「うん、これからどうしようか迷っていた所だ」

私は、唐突にも聞いてみることにした。

「美坂君…一緒に来てくださいますか…？」

「分かってる、この状況…なんなのか分かっている人と一緒に居た方が生き残れるしね」

みんなは何がなんなのかまったく理解していなかった。

「お前ら何を言ってるん！」

一人の男が喚きだす。

わめ…あ…ゾンビは…耳が…！！

「ああああああああああ」

背後には6人のゾンビが居た。

「うあああ！」

急いで教室の奥にまで走り出す。

「…武器も何もない…」

このままじゃ死ぬと思った時に。

ピスス…

聞いたことも無い様な音がしたのは美坂君の方からだった。

「改造エアガンさ…サプレッサーだけど付いてるし、威力は段ボールを重ねて作った厚さ80mmを貫通したよ」

…何で学校に持ってきてるの…。

「頼んだぞ美坂！」

そう言うとなを思ったのか、すぐ傍にあった誰かの部活用バッグから金属バットを取り出した。

「おい、それ俺の…」

「すまん！使わせてくれ！」

湧也はバットを握り直し…。

「美坂！少しの間辞めてくれ！」

残り一人のゾンビの頭に思いきり叩きつけた。
ゴッ…

鈍い音が鳴った。

「固って…」

それもそのはずだ、今日見たばかりのゾンビが腐ってるわけでもないから頭蓋骨はまだ固いだろう。

だが、ゾンビは息絶えた。

その光景を見ていた生徒は一斉に廊下へ走り出した。
とても大きな声で叫びながら。

私は、窓から運動場を見た。

ゾンビがゆっくりと、校舎に…大量に入ってくる…。

「大量に入ってきてる…」

また放送の入る音が鳴った。

そして夢と同じことを口走る放送。

「うわあああああ！やめ！やめろ！やめろ！痛い痛い！いたい
あ…」

そして校舎中の人…玄関に…外に向かって走る…夢と同じ…。

「美咲の言ってた夢と同じかよ…死ぬ訳にはいかないぜ…」

「美坂君…靴…どうする…」

恐る恐る聞いてみるけれど…この状態で外に出るわけにもいかない
し、靴を取りに行く暇もない。

「あるよ、靴、バックの中に」

彼は気楽そうにそう言って、バックに腕を入れたかと思えば靴を手
に取っていた。

「お前…どれだけ準備万端なんだ…エアガンまで持ってきて…」

「何言ってるんだよ、朝に外見れば変な動きしてる奴居るし、パソ
コンでネットを見ればゾンビが居るとか言ってるし」

それでこの準備…相当な…

「僕は、臆病なんだ、自分を相手から身を守ろうという考えが他の
人より高いと僕は自分で思うよ」

「まあ…お前のおかげで俺は助かった、お礼は言おう…ありがとう」
湧也が頭を下げたので私も一緒に頭を下げた。

「どういたしまして」

学校から出るのはどっちからにしようか…。

「学校から出るには二つのルートがある…」

「二つ…？そんなもの関係なしでとつと出れば良くないか？」

すかさず美坂君が口を開いた。

「ダメだよ、普通にいつもの下駄箱から通るとゾンビの山だ」
今頃になって落ち着いて周りの音を聞いてみた。

「うあああ！やめ！」

「ああああ！」

「いだだだいちぢあい！！！」

「みずくん！助け……」

「うるっせせえ！」

酷過ぎる……人間は、自分が助かるためなら……手段を選ばない。

「私は……お客用の玄関からの方が良いと思う……ダメ……かな……？」

「いや、それが最善の手だと思うよ」

美坂君が返してくれた、湧也は何をすれば良いのか混乱しているの
かな……役に立たないなあ。

「美坂君、あいつらは目が見えない……けれど音にはすごく敏感だから、音さえ立たせなければ……」

「分かった……エアガンも撃たないことにするよ……弾も限りがあるし
ね……」

私たちは歩き出した。

近づいてくるゾンビは石で離れさせる。

石がなくなったときには、もうすぐお客用の玄関が目の前だった。
ピスス……

美坂君が、ゾンビの目を的確に撃つ。

とても惚れ惚れしいが、とても気持ちが悪くなってくる。
このまま私たちは外に出た。

外に出た時に緊張感がすぐに途切れて、いきなり汗が噴き出た。

「ふうふう」

湧也も疲れたのか、親父くさい。

「美咲さん」

美坂君が訪ねてきたので、私はそっちに顔を向ける。

「僕に家族は居ません、あなた達について行こうと思います」
湧也がこっちに顔を向けたかと思うと…。

「それなら大丈夫だ、俺らも家族は一人もいない」

いきなり、人のプライベートな所を平然と言い出す。
もう、いい加減慣れてしまったけど。

「なら、これからどうするんですか」

それが、今一番困っている。

「私は…私は生きたい…私は…」

クチャツ

いきなり変な音が鳴ったと思い、みんな揃って後ろを振り返る。

「あああああ…」

ゾンビが人を食べていた。

それは、あまりにも生々しく…ゲームの世界ではなく…現実だと思
い知らされた。

とても臭う…腐敗臭ではない、血の匂いだった。

「歩いて…」

私が呟くと、みんなは少しずつ…ゆつくりと歩き出した。

そして、校門から出たと同時に…私は吐き気を感じた。

「…うう…」

「移動しよう…どこか安全な所…へ…」

湧也が私の腕を掴んで歩き出した。

ちようど道路の真ん中あたりで、休憩した。

周りにはゾンビが居なかった。

…キーンコーンコーン…

またチャイムが鳴ったかと思うと、近くにいた今まで気が付かなか
ったゾンビが学校に向かいだす。

「学校のおかげで、なんとかかなりそうだな」

これは同意できる。

「なあ、美坂…お前の銃ってどんな名前なんだ？」

とてもくだらない話をする…みんな…この状況を受け入れたくなくて、いつもの日常のようにしたくなる。

人間の心理状況だ。

「これかい？これは、M16A2と言って…まあ、エアガンだから特に語る必要もないけどね」

「つーことはだ、お前は軍オタで、本物の銃が出てきたら熱く語り出すんだな？」

…仲好さそう、あんまり話さないと思ってたけど。

「よく分かってるじゃないか」

「そろそろ…お喋りは終わりにして、行動しよう」
考えは纏まった。

「どうするんだ…？」

「戦う」

それが、一番の…最善手だと…思うよ。

そう言う…彼らは、いきなり笑い出した。

「アハハ…そっか…そうだよな…やる事なんか決まってるよな…」

「だね…アハ…戦わなきゃ死ぬんだし…戦うから、味方出来て…」
…やる事は決まった。

「とりあえず…警察署に行こうと…思うの…」

あそこなら武器はあるし、食事も取れそうだし。

「じゃあ、そうしようか」

「ああ、美咲…お前が俺らのリーダーだ」

…？

「そうしようか」

…何故に？

「どうして？」

湧也は笑いながら。

「お前が一番頭が回るから！」

とても、簡単な理由だと思ったけれど…私たちは、またゆっくりと

歩み続けた。

第二話・やる事を、見つけた…小さな事だけど。（後書き）

難しい、この後どうしようって事はないけれど…。

主人公チートで男の奴しか書いたことがないから難しい…。

第三話：肉は嫌だ。（前書き）

キャラ紹介

野郎の紹介は誰も好きにならんけど。

よつば
四葉 湧也

身長 171cm

体重 57kg

趣味 釣りと読書

平凡な人間

本当に普通…特に一筆するところもなし。

だが美咲と同じく4歳のころからの記憶がない。

好きな本は、パニックSFだそうだ。

第三話：肉は嫌だ。

…人が死んでる…？

「人が死んだらゾンビになるじゃないの？」

湧也に聞いてみるけれど、なんとなく緊張したような顔をしている。
「それはだな…いや、ちょっと待て…なんでお前がそのぐらいの事に気付かない」

…馬鹿にしてるのだろうか。

頭が良い…それは違う。

大きな間違いなの。

私は…瞬間記憶能力者…。

どんな物なのかを考えると、実に簡単でくだらない。

見たものを、忘れない。

何があっても…だから、たまに変な夢を見たりする。

忘れられないから昔の記憶や、くだらない事がたまに出てくる。

「私が、なんでテストの点数が良いのかぐらい…知ってるのに…」

テストも、教科書を見て…記憶するだけ。

「まあ、そう拗ねるな…」

「どういう事ですか？」

美坂君は、何も知らないから当然だ。

「私は、瞬間記憶能力者なの」

と言っても、知ってる人なんかほぼ居ないけど。

「ああ、あれか」

なんで知ってるのか聞きたいんだけど。

「…良く…知ってるね…？」

人によつては、これを良いことだったり悪い事だったりと思う。

それはなぜか。

楽しい事を一生忘れない。

それはなぜか。

楽しくないことを一生忘れない。

たとえば、ゾンビが人を大量に食べてるとしよう…。

それは、一度見たら…忘れない。

どれだけ生々しく、気持ちが悪くなろうと。

だから、人によつては…良い事だったり、悪い事だったりと思う。

「それはだね、アニメに出てくるんだ」

本当にオタクとは思わなかった。

オタクと言つても、その人の主観や…考えによるけれど。

「そう…人が死ぬ原因は？」

話がずれてしまったので聞いておく。

「混乱、パニックによる車の暴走や、恐怖からの狂乱…って所か…

？美咲みたいに難しく言う」と

…難しく言つてない…。

実際はもつと複雑なんだろう、色んな理由があつて…人が死ぬことなんて…珍しくなくなるのかな…。

「そつといえは、警察署つて遠いの？」

私たちは、私の家の方向に向かつている。

美坂君の家は反対方向で、こつちには来た事がないらしい。

「美咲の家から大体…」

湧也が考える中、私はお腹が減った。

「20分ぐらいかなあ」

自転車には今は乗っていない、美坂君が持っていないからだ。

「けつこつ遠いなあ」

…美坂君の体型を見してみる。

今更ながら、実はあんまり太つてないようだ。

肩幅がおっきいのかな…。

体力はけっこうありそうなのに…。

「私の家でご飯…食べる？」

あんまり、料理を作るのは上手じゃないけど…湧也に作らせるよりは100倍マシだとは…思いたい…。

ゾンビは、恐ろしくないない。

なんでだろう…。

でも、道には事故で炎上した車が大量にあった。

死んでる人も。

その車には近づかないようにしてる、ガソリンに引火して爆破すれば命は無いと思うの…。

死んでる人には、もう慣れてしまった。

だつてたくさんいるもの…。

人間の適応力はすごい、目の前にある物事に早急に取り組む。

自然…温度とかには、とても弱いけど…。

それとも、目の前の物事を受け入れたくないのか…受け入れないのか…。

「おおー良いねえ、飯かぁー」

私は、あんまり食べれそうにないけど…お腹は減ってるけど…あの学校で見たのは…。

忘れない…。

「美咲さんは料理上手なのかい？」

私が喋ろうとしたら、湧也がかわりに何故か、喋った。

「なかなか上手いぜ、飯も美味いし…要領が良いんだよな」

まるで自分の事のように…。

「時間…あんまり掛けたくないし…凝ったものは作れないよ…」

何を作るつか…冷蔵庫には…特に何も入ってないし、今日買つ予定だった。

だから湧也の家に泊まったのも少しある。

お肉は…絶対嫌。

…ゾンビ…のはず…。

「う…う…う…」

どうする…今通っている道は細い…音も立てるわけには…。

「俺のバットなら大丈夫だ」

本当に小さく言ったはずなのに、後ろを向いていたゾンビはいきなり振り返った。

「ああああ」

徐々に声が大きくなっていく…と思ったら湧也が飛び出て殴っていた。

ゴッ

鈍い音が鳴った。

「あああああああ！」

死んでいなかった…人間の頭蓋骨は馬鹿に出来ないほど硬い。

「湧也…足を…！」

「おおらあ！」

あまり声を出さないで欲しいのに。

メキヨリ！

「うう…うう」

ゾンビは変な声を出す、足の骨を完全にへし折ったために歩けない。

「これで這いつくばるから安全…下手に頭は狙わない方が良い…」
どう考えても、高校二年生の腕力じゃ無理だった。

「…分かった…」

「それと音を結構出しちゃったから、少し急ごう…」

私がそう言くと、彼らは頷いた。

そのまま歩けば、もう私の家だった。

あんまり思い出のない、一軒家。

ある思い出は、みんな何処かに消えてしまった。
思い出せない。

これだけは。

私にあつてはいけないはずの…感情…。

「入って」

「お邪魔しまーす」

二人の声は…ちょうど重なった…。

第三話：肉は嫌だ。（後書き）

毎日更新は無理だな。

第四話：つかの間の休息…美味しいご飯…。(前書き)

だいぶ更新が開けちゃいますねー

しょうがないですけど。

特にどうしようもない…書くことも無いぜ！

第四話：つかの間の休息…美味しいご飯…

…ご飯…何にしよう。

私は、食事を作るのは得意。

作るのには嫌いだけど。

しかも料理の名前さえ知らない。

湧也には、「食事を作るのに料理の名前を知らんのはおかしい」と言われた。

でも、頭で味覚の計算をして作れば大体食べれるのが出来るよね。

「僕、女の子の家に入るのは初めてだなあ…」

美坂君はあんまり女性と話すイメージは無い、と言うよりかけ離れている。

「そうか？俺は何回も入った事があるぞ」

私の家だけだろうに…。

「美咲さんの家だけでしょ？幼馴染だから」

ほら、美坂君も言ってる。

「な訳ないだろ、女の子家なんか何回も行っただわ」

…何…今のは聞き捨てならない。

…別に…特に…気にする必要なんか…無いのに…。

悔しい様な…気がするの…。

「湧也…」

「んー？」

この男は…まるで何も無かったような顔でこっちを振り向いてくる。

「制服…着替えてくるから…美坂君を御もてなししといて」

「…OK分かった」

いきなり英語になったかと思うと、いきなり微笑みだした。

一体なんだろうか。

…カギは閉めておこう。

そして私は階段を上り、二階に上がった。

「なあなあ、美坂」

「どうしたんだい」

「覗きに行こうか」

「ぶっ」

「どうしたんだよ」

「いや、君はなかなかのエロテロリストだなと」

「気にするな、美咲もああ見えて見た目はなかなか綺麗だろう？」

「なにがなかなかなのさ、彼女は学校でも美少女ランキングで一位だよ？」

「なんだそのランキング、全然知らないんだが」

「君はあんまり興味なさそうだしね」

「で、どうすんだ？」

「もちろん、行きます」

「フッフ」

「よし、握手をしようじゃないか」

ガシッ！

「さあ行こう」

「よし行こう」

「あんまりあいつ、凹凸ないから微妙かも知れんぞ」

「関係ないな、貧乳萌えの僕にはまったくと言って関係ない、むしろ本望だ」

「そうか、俺とは逆だな…まあ良い…行こう」

…私は、上のブラウスを脱ぎ取り…そして制服を脱いだ。
スカートも丁寧に脱いで、上の制服と一緒に畳んでおく。

…この状態で、全身まで移る鏡を見る。

「…凹凸が無いのってどうなのかな…」

とても心配。

胸が全然ないのは、男の人はどう思うのだろうか。

なんとなく、どうでも良いけれど生殖機能としてどうなのか。

…揉んでみる。

…もちろん何ともなかった。

よくよく思うと、汗をけっこう掻いている事に気付いた。

すぐ傍のチェストからタオルを取り出し、丁寧に拭いていく。

デリケートな部分も丁寧に拭いていく。

ついなので、上下両方とも下着を変えた。

そして、普段着だけど…いざという時に動きやすい格好にした。

上は、シャツに少しのフリルが付いた薄い絹の服。

下は、短パンにした…いつも家に居る時は短パンで良いのだけど…

外では絶対に履かない。

なぜかはよく分からない。

…ドアノブが今静かに回った。

そして、少し焦って階段を下りたのか…足音が鳴った。

「…カギは掛けといてよかった」

私は、脱いだ服をみんな洗濯機に回すことにした。

もう学校もないので関係ないだろう。

ドアノブを回して、一階に降りた。

そして、二人の居るはずのリビングに入った。

「湧也…入ろうと思った？」

多分私は、頬が紅潮しているだろう…恥ずかしかった。

「いゆや、そんなことはにやい…あ！美坂が入ろうとしてたぞ！」

…噛みすぎ噛みすぎ…

「おい！四葉！好き放題言わないでくれ！」

…。

「美咲さん！そんな事はないからさ！」

…、健全な高校生と言うべきか…家の中に入れたのは私だから…特に言えるわけでもない。

「別に良い、食事は…多分すぐ出来る」

「美咲！こいつだ！こいつがやったんだ！」

とりあえず、私はドアを閉めて、奥のお風呂と洗濯機がある部屋に向かった。

…ここで向こうから声が聞こえた。

「…なあなあ、美咲の奴…下着持ってたよな」

「うん、僕…見てしまったよ…」

「そう悪く思うな、むしろ眼福と思っとけ」

「そう言う君はどうなんだい？」

「何がだ？」

「息子が多き」

「うるせ」

しまった。

…特に気にする事でも無いと思うけど…、注意した方が良いつて友達に言われた事もあるしなあ。

とりあえず私は洗濯機の中に洗濯物を放り込む。

…でもこれから…これからこの家を離れるかもしれない…。思い入れの無い家…。

でも…ずっと…ずっと一緒に生きてきた家…。

何度も何度も幼児保護の人たちが来た…。

…私は拒んで…、やれる事は自分でやった…。

なぜか通帳のある場所も…ATMにも自分で…一人でやっていた。

もちろん周りには異様な目で見られた。

だけど、保育園には湧也が居て…。

「クスス…」

あの保育園には子供が少なくて…湧也とはすぐに仲良くなれたなあ。そんな事を今でも覚えているのはすごい…なんて言われたこともあったな…。

私は、水場のドアを閉めて…リビングに向かった。

このリビングの中にダイニングキッチンとでも言うのか…そう言う物が付いてる。

ダイニングキッチンの開けた空間の前にテーブルがある。

「飯は何にするんだ？」

…私はお米が好きだからお米に合う料理が良いのだけれど…。

「中華料理」

とだけ言っておいた。

「女の人の作る食事なんて久しぶりだよ！」

…美坂君には…お母さんが居ないの？

「美坂、お前親は？そう言えば俺たちに付いてきて良かったのか？」

「うん、僕には親がいるけれど、外国で仕事してるし」

…本当に…？なんでだろう…つい笑ってしまう。

「何の仕事だ？お前の性格と身なりからして金持ちには見えないぞ」

「えーとおー父さんが宝石商で…」

ダメだ、ここで声に出して笑ってしまった。

湧也も笑っている。

「アッハハハ！お前の父さんがか！」

「何が面白いんだよ」

…あんまりそう見えない…たしかに太ってるから裕福なのかもしれないけれど…どちらかと言えば御曹司とかでは無くてオタクだ。

「まあいいや、母さんは音楽家でおじいちゃん学校を三個ぐらい作ったかなあ」

……実は凄かったっていう。

「…良い友達になれそうだな！主に金関係とかで！」

「それただの恐喝だと思うよ」

「美坂君は別に良いの？」

…おもむろに聞いてみる。

「家の事かい？家は別にいくらでもあるし、家にはメイドや執事が…」

「てめえ、おもつくそ金持ちだな」

あ、私の料理なんかが口に合うだろうか。

「ご飯…美味しくなかったらごめんなさい」

良いご飯食べるんだろうな…。

「いやいや！美咲さんの料理なら絶対に美味しいから！そんなかしこまらずに…」

とりあえず料理を作る。

春雨と青椒肉絲（チンジャオロース）で良いかな…。

お米多く炊こう…初めてだな…家に三人の人が入るのは…。

二人の会話が聞こえてくる。

でも、さっきまでとは違い…いたって真面目な話だ。

これからの…。

私は料理に集中する事にしといた…まだ何も考えなくて良い…まだ…。

釜に水をさつと通し、お米を四合入れて「急速」に設定して炊いておく。

次は春雨、春雨の素が…ない。

次は青椒肉絲、青椒肉絲の素が…ない。

冷蔵庫には、春雨をどうみても作れる食材。

冷蔵庫には、青椒肉絲をどうみても作れる食材。

料理と格闘を開始した。

春雨はそうめんを麺にして、タケノコにワカメを使う。

春雨とワカメをお湯に通して、タケノコを切る。

乾燥ワカメなので出汁も出るから楽。

あとはあんかけを作り、かけてタケノコを乗せれば良い。

タケノコはお湯に通すと臭みも消すからやらないと大変なことになる。

他にも必要な事はあるけれど、あんかけで全て行えば良い…と思う…。

青椒肉絲は、アスパラや豚肉、ピーマンを炒めれば良い。

お肉は、塩と胡椒で味を付けてよく揉む。

アスパラは冷凍なので電子レンジで解凍。

ピーマンは輪切りにしてお肉と一緒にフライパンに入れる。

少しの時間が経てば今度はアスパラを入れる。

春雨に使ったあんかけを途中で一緒に入れて、少しの時間炒めれば完成。

…ダメだ、一人で食べてしまいそう。

「出来た…」

報告しておく、炊飯器もちょうど鳴って、ダイニングキッチンの台の上に料理を置く。

「おう、見てたぞ」

「美咲さん料理上手だねー」

…なんとなくだけど照れる。

置いた料理は湧也たちが持つて行ってくれた。

みんなで声を合わせて。

「…いただきます」

…これは、よく出来たと思いたい。

湧也は無言でずっと食べていた。

「美咲さん、うちの料理長と同じくらい美味しいよ！」

…お世辞だろうか。

「特にこのあんかけがさあ、たぶん頭で計算して料理してるんだらうけど」

「…そう、よく分かったね」

驚いた、まさか分かる人が居るとは…みんなこんな風には料理をしないと聞いたのだけれど。

「うちのシェフがさ、料理は実は頭でするものだ…どれか一つの調味料や付属するものがあればたぶんそうだろうって言っててさ」

こんな風に食事の時間は過ぎていった。

「美咲さんが一番食べたね…米が四合なんてびっくりしたよ」

「こいつは一人で二合食うからな」

…湧也がよく口走る言葉だ。

私の体格でそこまで飯が入るのはお前がブラックホールだからだな…なんて言われたり…。

「食後のお茶…飲む？」

…返事は聞かずに三人分急須でお茶を入れる。

「うまい」

「…これからどうするの？」

ゾンビ…か…。

「その事についてだが、警察署に行った後はコンビニにでも籠ろうかと思うんだ」

そうだった…私たちは、今…世界が…終着に陥ってるんだ…。

今までのも、そしてこれから…一体…どうなるのかな…。

「そう…布団は…湧也が出してあげて…私は洗い物をするから」

「おう」

現在PM10時…。

「湧也、ゾンビに対して武器を」

この事について全く考えてなかった。

「僕のエアガンは？」

「美坂君のはたしかに強力でも使えるけれど、問題点が三つ…
あんまり言いたくないけれど。」

「音、これは完全に無くしてはいない、弾、いちいちBB弾を取り
に行くわけにもいかない」

「なんだなんだ、いっぱい弱点あったなあー」

美坂君の顔は少し残念そうだった。

「それと、もっていく弾が音を立ててしまう事」

美坂君の顔がいきなり変わった、そこは盲点だったようだ。

「…確かに、バッグに入れるにしても、歩くたび音を立ててしまう
ね…」

「ならどの武器が良いんだよ」
うるさい湧也だ。

「鈍器と刃物」

…二人の表情はいつそうに真面目になった。

「これが…一番使うのに辛くて…一番…強力な武器…」
元は人間を殺すのがどうだったのか…。

「二人は…人…ゾンビを殺せたのはなぜ…」

二人は、声を合わせて言った…それはとうぜんの言葉だったの。

「「生きたかったから」」

とても重くて、あまりにもエゴでそれでいて真実な心理だった。

「そう…とにかく家の中を探して、武器になるようなものを見つけ
て…」

二人はうなずくと二階に上がっていった…。

二階…二階…？

あ。

「二人とも、私の部屋ダメだよ」

「くそ！」

何を考えてるのか…。

でも、こんな日が続くことを願いたい…。

叶うわけがないけれど

第四話：つかの間の休息…美味しいご飯…。（後書き）

所々おかしい所があるっぽい。

料理は、本当にざつくばらんだけどそこはよろしくですよ。

第五話：ああ、疲れた…あ——コラ変態——（前書き）

変態です。

あー…早く進めたいけど適当に描写は出来ないなあ。

第五話：ああ、疲れた…あ、——コラ変態——

…武器を探してから十分に時間が過ぎたころだった。

「何があつた…？」

私は、自分の部屋から持ってきた武器になるようなものや、使えそうな道具をテーブルの上に置いた。

目の前に居る二人…つまり湧也と美坂君だが、湧也は満足げに笑みを浮かべていた。

美坂君は、なぜか肩を落として残念がつていた。

ニコニコしてる湧也が口を開くと「かなり見つかったぜ」と呟く。

そして注目の美坂君は「微妙…かなあ…」と、どう見ても微妙なレベルじゃない落ち込み方で喋った。

私は、二人にテーブルに物を置くように指を指すと、彼らは物を置いた。

私の持ってきたもの。

懐中電灯…一個

単二電池…四個

金槌…一個

釘バット…一本

「おい、待て」

「何を？」

「なんだ釘バットって」

「女の子一人が、誰かに襲われたら危ない」

「そつ言う問題か」

「うん」

私としては、まあまあかと思う。

私は自分の部屋しか見てなかったわけだし。

湧也の持ってきたもの。

包丁…三本（種類がある）

もう使えない電球…二個

ペットボトル1 / 5? …二本

木刀…一本

「電球の用途は何でしょうか！四葉隊長!？」

「その事についてだがな美坂君！」

「なんですか！」

「音に反応すんなら、これ投げたら良くね？マジで良くね？みたい
な」

「ほほお」

「木刀は家には無かったような気がするのだけれど…?」

「俺んちから持ってきたよ、つか隣だし」

「そう…」

美坂君の持ってきたもの。

ピン…二本

「これだけか、美坂？」

「うん」

「…これは…ちょっと…」

「あ、美咲さん、ガソリンある？」

「…なぜ？火炎瓶を作るにしても、ガソリンは無いし、灯油もない」
「そっかーって良く分かったね」

「映画で見た」

「そ…そう…（え？実は、けっこうサバイバルマニア…？いや、むしろ怖かったりして…？）」

「よし、ま…こんなもんだわな」

湧也が口走った。

…これで…本当にやっていけるのだろうか…。

絶対に無理。

何があっても…。

「湧也…」

私が湧也を呼ぶと、彼はまた暢気そうに「んー？」などと喋り出すのだった。

「湧也…今の装備で戦うのは到底無理…」

「分かってるさ」

……意味が解らない。

「なら！なんで！」

美坂君は、私がいきなり叫び出したのを見て驚いていた…だが湧也はそんなことは微塵もなかった。

「逆に聞くよ？美咲」

私は、ただ無言で話を聞いた。

「で？どうすんだ？俺らが死なないとも思ってるのか？不可能だ」
彼が喋っている途中から徐々に顔が蒼くなっているのが目に見えていた。

私は…私は…馬鹿だった…。

みんながみんな、同じことを思っているんだ。
でも、だからどうしろって言うのか…。

生きれる保証はない…。

ここで私は、夢と…そして学校での事を今になって思い出す。

鳴り止まない救急車と思われしきサイレン。

目の前で死んだ人々。

人の事を、なんとも思わず躊躇せずに自分が生き残りたいが為に他の人を殺そうとした…クラスメイト。

夢で見た、自分が死ぬ光景。

私は…何すれば良いんだっけ。

「湧也…私って、何すればよかったけ？」

湧也が笑ったかと思うと、彼は「何言ってるんだ、深刻に考えるな…生き残れば良いだけだろ？」

そうだ、生きればいいんだ。

誰も、助けず…自分だけが生き残れば良いんだ。

「さて、もう寝よう…明るい朝のうちに色々行動したいしな」

湧也の意見には賛成できた…、そうだ、私たちは今。

生きているのかさえ分からないような場所に居るんだ。

そうだ、まだ家に居るから良いんだ。

外に出ればどうなるかは分からないのに…。

私は、考えが甘いかもしれない。

……何を考えようともう遅いかもしれない……こんな事を考えるぐらいなら……早く……早く寝よう……。

彼らは布団を取り出して、寝る準備をし始めた。

「湧也、お風呂……入ってくる……」

私はお風呂が大好き……誰の事も考えず、自分だけの時間……そして……暖かくて……何も考えなくて良い。

この記憶の持ち方の特性上……何も考えないのはほぼ出来ないと言っても過言ではない。

「美咲」

湧也に呼ばれたので、ドアの取っ手に手を掛けたまま湧也の方を振り向く。

「覗いてもOK？」

……。——これ何て答えれば良いの。

「お好きに……」

……無難……？

いや失敗だ、湧也だけならまだしも美坂君が居るのにこれは失敗だ……。

うう……こう言うのはつい焦って、正確な判断が出来ない。それにあの顔、変態丸出しで叩き殺したくなる。

……ダメだ、なぜか今日は冷静じゃない……落ち着こう……。

「よし、美坂、見るだろう？」

——バカ……。

「見ない見ない、見られて嬉しい人なら良いけど美咲さんはどう考えも違うでしょ」

「見たいだろ」

「モチのロンだよ、と言うよりさあ……それ愚問だよ」

「変態が」

「君こそ」

二人が手を取り合って笑っている。

正直気持ちいいものではなかった。

静かにゆっくりと上に向かう…寝巻、つまりパジャマを取りに行く。タンスの収納の中から寝巻を取り出して、小さい収納から下着を取り出す。

普通の胸を押させるブラジャーのようなものではない。

元々胸の無い私には関係ない。

……自分で言ってる悲しくなってくる。

何と言えば良いのか迷うが、キャミソールのような物…と言つよりキャミソールだ。

そのまま寝ても大丈夫なロングキャミソールと言つらしい。あんまり興味はない。

下の方はもう記述しない、R-18に行つてしまふ。

お湯は出かけるときに…と言つより朝ごはんを私が作ってる間に湧也がお湯を張っておいてくれた。

服を脱いで、閉じ待っているドアに手を掛けて開ける。

キィ…と言つ、あんまり嬉しいともいえない音が鳴るのだが、もう慣れてしまった。

お湯を桶に入れて頭からかぶった。

「暖かい…」

とても安堵で嬉しくなる。だが、聞いたことのある音だ…階段で焦つて足音が鳴った時の雰囲気と音だ。

予想はしていたので大丈夫だ。

湧也が寄ってきていたら、そろそろ私も怒ってしまう。

…冗談にもほどがあるもの…。

私は湧也の名前を呼ぼうと思うが、様子がおかしい。

雲ガラスと言つ、影だけなら分かるガラス越しから分かる。

映画でも見たことがある、シャワーシーンで…ゾンビが襲ってくる

ことだ。

冗談じゃない、ここで声を出せば…死ぬ…。

冷静な判断が出来ない。

でも、湧也なら…まだ良い…幼馴染の関係もあるから、ちょっとぐらいなら見られたこともある。

幼馴染ってそんな凄かったけ。

「ああああ…」

予想はあっていた…思わず声を出さなかったことに対して、褒めたところだが…冗談じゃない。

思わずの事で、つい考えてしまう…死について。

その事で頭がいっぱいになり、思わず涙が出そうになる…。

今頃思い出す…みんなの…ゾンビになった時の顔や…表情…そして、叫び声を。

「あーあううあー」

いきなり能天気な声が聞こえた。

どう考えても声は湧也だった。

「…あー…美咲？」

…よくよく考えればゾンビが入るわけがない。そもそも来たなら侵入方法は？

こういう時に、いきなり気が付くことってよくあるよ…ね？
それと同時に私は思った。

殺しちゃおうかな。

あそこまで怖がった私がとても恥ずかしい…。

「美咲ー」

「…何…」

つい、乱雑に言葉が出る。

「怒ったか？怖かったか？」

…むう…

「両方」

答えてしまうのもどうかと思うが、しょうがない。
せつかくののんびり出来る…のんびり出来る最後の時間かも知れないのに。

「そうか、すまん」

すまんとか思うぐらいならやめてほしかった…。

足音が離れていく。

…なんなんだろう。何しに来たのか…。

私は手のひらを被せてお椀を作り、お湯を掬い上げて顔にかけた。

——パシャツ——と言っ音を立てて私に心地よい気分を与えてくれた。

…本当に怖かったのは何故なのか悔しかった。

私は静かにお湯から出て、ドアに手を掛ける。

「はあ…」

とため息を付いてしまった、疲れたな…早く寝よう…。

「え」

何今の声、まだ居たか、何をしている。

私は無闇にドアを開けた。

やはり湧也だった。

さて、ここですまったと考える要因が一つあった。

私は、さっきまでお風呂に入っていたことだった。

あーあ…。

「ちょ！美咲！おまつ！」

「見るまえに早く出てって」

「ああ？ああ！すまん」

…馬鹿が。

どう考えても何しに来たのだろうか、予想は付くがここではR - 1

5までしか対象にしていなかったため危険だ。

パジャマに着替えた後、タオルを首に掛けたまま二人の居るキッチンに行く。

湧也とは顔を合わせたくない…人はここで恥ずかしいと思うのだろうか私は違う。

それは、中学三年生のときだった。

この日は健康診断でたまたま病院に行った時だった。

そのころの私は…体の調子がおかしかった。

何と言えば良いのか分からないが…物事の置き方がゆっくり見えていた。

何故かはわからないけれど…不思議な感覚だった。

自分以外のみんながゆっくり動くように見えたのだった。

だがあくまでも見えるだけで私の動き自体は早くなかったのだった。これは湧也にもあったようだった。

そこで出た判断が、精神科に移動させられた。

まったく訳がわからなかったが…普通の人から見れば頭のおかしい人にしか見えないだろう。

内科ではダメだったようだ。

それと全く関係ない…欲しくない判断で、総合性感情希薄性症候群と言われた。

簡単に言えば、感情が薄いだけらしい。

特に恥はじと言う感情が薄いようだった。

次に笑わらい…だそうだ。

だけど、私には…人を憎む感情が普通の人より高いらしい。まったくそうは思わない。

人は…人間はゴミだとは思うけれど。

「あ、美咲…さっき言わなかったんだがアイス食っていい？」

…むう…

昨日の今日と言うべきか…よく話しかけるものだ…

それが湧也の良い所であり悪い所でもあるのかもしれないけれど。

「どうぞ…美坂君も食べる…？」

そう言うとははいきなり笑みを浮かべて「はい！もちろん頂きます！」と軽快に言うのだった。

体型通り、食べるのが好きなのか…。

私はアイスを食べた後は、すっかり疲れ果てたのか急に眠気が襲った。

「もう寝るね…バスタオルは…私の使ってたので良い？」

バスタオルは私の部屋にあるので、いちいち取るのはめんどろった。

「おう、おやすみ」

「おやすみ」

私は無言で頷くと階段を上って、部屋に入った。
ふと思った。

悪夢を見るんじゃないだろうか。

それも、今までで一番最恐な夢を。

第六話：美坂君が怖いと言っ事にやっと気が付いた（前書き）

遅い…更新が遅い…。

やっと！武器！銃！89式！行くぞ！バンバン！

第六話：美坂君が怖いと言っ事にやっと気が付いた

嫌だ。

死にたくない。

来ないで。

来ないで！辞めて…辞めて…来るな！！！！！！

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

死にたくない。

「はあ……はあ……ふうう……」

冷たい汗を掻いて私は起きた。

…噛まれた…噛まれたと思った。噛まれたと思われた…つまり夢だけ…右腕を見る。

もちろん何も無い。

ベッドの脇にある時計を見てみた。…悪夢を見た後の時計はだいたい遅いぐらいなのだけ…。

正直びつくりした。

まだ3時半。

これはちよつとどうかと思う…。

窓を開けると空はもう明けてきていた。

今の季節は夏…3時半と言う速さでももう道路は見えるほど目の前は見えていた。

それと、冬じゃなくて良かったと思える。

なぜなら冬だと、毛布などを来たりして体温を保温しなければいけない。

夏なら、暑いだけで済む。

どうしようか考えるが、何も浮かばないので服を着替えることにした。

短パンにキャミソール…楽で動きやすい格好にした、いつ走って逃

げるかも分からないからだ。

ドアを開け、下に降りていく。必要なものは全て下に…キッチンに置いておいた。

階段まで降りると、少し肌寒い空気に包まれている廊下に出た。

キッチン前のドアに手を掛ける。

「ああ…」

…聞こえた、ゾンビの声だった。

私たちは、馬鹿騒ぎをしていた…と思う。それが今祟った。

ドアを見るとドアの擦りガラスから4人の…いや、4体のゾンビの影があった。

無言でゆっくり音を立てないように…いや、関係ない、もうドアを叩いている。

居るのに気付いている証拠だ。悪夢の原因にはこれもあったかもしれない。

ドアを素早く開けて、湧也の顔に蹴りかます。途端に「ぬおおお！」「と頭を押さえて悶えだす。

「湧也、朝ごはんは無理…。美坂君を起こして！ゾンビが居るの」

湧也は、ハッと気がついたのか、ゾンビがドアを叩いていることに気付いた。

「美坂！行くぞ！敵だ！」

湧也が美坂君を揺らして起こしている。そのうちに私はすぐに荷物を持った。

「んんうゝ…な…なんだい？…」

寝ぼけてる。

「ゾンビだ！」

湧也の声に気が付いたのか目をこれでもかと言うほどに開けて自分の荷物を持った。

「行くぞ！」

湧也の掛け声で…気合…とでも言うのか…私たちは、窓から外に出た。

フフ…とんだ家の出方だなあ…。未練も無い家だけれど…何故か悲しい様な気がする…気のせいだけど。

私たちは無言で玄関の方まで行く。

ここで湧也の電球が役に立った。電球を離れた方に投げつけて、割れた音にゾンビが寄っていく。

目的地となる警察署に向かう…少し遠いけれど…付けばどうにかなるはず…。

警察署まであとまだ半分とまで言ったところで湧也が小声で話した。

「なあ、付いてまずやる事は？」

まだ付いていないし、その前に私たちは死ぬかもしれ無いのに…。

「僕としては、証拠品押収室に行くべきかな」

また聞いたことの無い言葉聞く。私的には、犯罪を犯した人の物が置いてあるのだろうけれど。

予想では、拳銃や…多分火炎瓶などの類があるだろう…。

映画で使っていた火炎瓶は、ゾンビを燃やすだけで余計に危険な状態になっていたけれど…。

ゾンビには大量に出会う…異臭を放ち、人には分らないうめき声を上げて自分の空腹感を満たすために動いている…。

…？空腹感を満たすために動いているのだとしたら…料理を出せば良いのかな…？

足音を立てない歩き方は湧也が知っていた、何故知っているのか聞いて見ると「鬼ごっこで遊ぶと覚えてた」と言っていた。無茶苦茶すぎるような…。

歩き方は至って簡単であった。右から足を出すとしたら、左足に体重を込めて右足には体重を掛けずに歩く。

それを繰り返すだけだった。湧也は慣れているようで疲れた素振り

は出さなかったが、慣れていない私や美坂君は疲れてしまう。
そして、いつ食べられるか分からない緊張感が襲う。

これほど、酷なことは考え付かなかった。

目の前には橋がある。そこには10数体のゾンビが居る。
大きい橋だが、車も通る橋だった。

だがそこには、炎上している車しかないガソリンの臭いが立ち込める橋だった。

動いている車は今思うと一度も出会わなかった。

何があったんだろう。渋滞ぐらいはしているかと思ったのに。

湧也があと一つの電球を投げると、ゾンビは割れた音に気が付いてそちらに向かっていった、実はゾンビを切り抜けるのはとても簡単なんじゃないかと思う。

「この橋を通ればすぐに警察署だぜ」

湧也の声に頷くと、私たちは走った。

目の前にはゾンビが居なかったため、安全かと思ったのに。

炎上していて煙で見えなかったのか、ゾンビが沢山居た。

途端に、学校で聞いた音が鳴った。

ピスススススス...

美坂君がエアガンを撃ったのだった。

「美咲さん！僕には弾がありません！急いでください！」

その声と同時に私たちは走った。

弾は、歩くと音を立ててしまったため家に置いて来た...

走る。

走る。

ただ走った。なりふり構わず。

ゾンビは追いかけてくる。

遅い。

遅い。

遅かった、今まで対策を考えていたのが馬鹿らしく思えるほど。

「はぁ…はぁ…」

息切れを起こしているのは私だけではなかったようだ。

そして…目の前には…警察署があった。

「ちよつと…待って下さい…」

美坂君がよろよろと歩いて行く。

それと同時に、歩いて行く方向へ私は目を向ける。

駐車場に置いてある…。

「黒い…ワゴン車…？」

それは、普通のワゴン車に比べると少し大きいワゴン車だった。

「ち…違います…軍事車両です…」

息切れを起こしながら、ゆっくりと歩いて行く美坂君。

でも私はそんな事よりも、軍事車両と言う言葉に耳が行った。

「これは…警察の中でも…特殊部隊などが使う車なんです、この中には…武器が…あるんです」

武器…それは…初めて…対ゾンビとして使える物かと思った。

「僕たち…ラッキーですよ…」

美坂君がエアガンを道端に捨てて…そして後ろのドアの取っ手のような場所に手を掛ける。

力を込めるのが分かった…が、開かなかった。むしろ当然かもしれ

ない、一般市民に武器を取られては困るのだから。

私と湧也も、そちらに歩いて行く。

「ガムテープ…ありますか？」

ガムテープ…？持ってきてはいない。

「無いな…何でだ？」

「ガラスを割れば良いんですが、音が立つんですよ…でもガムテープを使えば破片が落ちたり、音がしないんです」

目をキラキラさせながら言われても困る。車の窓を見るとスモークシールが掛かっており中が見えなかった。

湧也も頭に手を当ててヤレヤレ…と言った様子で口を開いた。

「お前は…一番敵に回したくないよ」っと、ふざけた様子で言った。
「とにかく、ガムテープが必要なんです…多分鍵が掛かっていると
いうことは最低でも武器はあります、それに特殊部隊の使う武器な
ので…」

とりあえずニヤニヤしながら言うのは困る。

特殊部隊…自衛隊ののかな…。SWATとかって言うわけでもなさそうだし。

「まあ、良いか…警察署の中にも入ろうか、ガムテープもありそうだしさ…それに銃も」

湧也の声とともに私たちは警察署にゆつくりと足を踏み入れた。

第六話：美坂君が怖いと言っ事にやっとな気が付いた（後書き）

所々、場所の説明が適当かも知れません…。すいませんです。

第七話：武器…美坂君…落ち着いて。（前書き）

武器だあ。

ここでありえない武器が出るのは、ちゃんと本編と関係あります。
私の好みじゃありません。
ありませんったら！

第七話：武器…美坂君…落ち着いて。

警察署の中に入る…。

今気づいた事なのだけれど…：おかしい。バリケードをしていない？警察ならこの程度の動きはあると思ったのだけれど…。

そして…中にゾンビは居るのに、何で…：生きている人は…居ないの…。

「美坂…お前に銃は無い…武器もない…あるのは俺の木刀とバットだけだ…」

湧也が美坂君に木刀を差し出した。

それを無言で受け取る美坂君…それと同時に湧也は「銃と違って…殴ってるって感触が味わえるぜ…」と呟いた。

私も釘バットで殴る事にした。

目の前にゾンビが一人…湧也に向かって歩いてくる、声が聞こえたのだろう…：静かなこの場所では小さな声でも響くのだろうか…。

私は湧也の肩に触れて後ろに動かす、それに気づいた湧也がゆっくりと後ろに下がった。

渾身の力を振り絞る…目を瞑る…振り下ろす…ああ…何で、こんな事に…。

ミッシャアア…。

今まで聞いた事の無い音に怖くなる…殴った感想は、何て…：気持ちが悪いんだろう。足が震える…膝を地面に付く。

殴ったのは首、千切れたりしなかったけれど…頸椎を完全に破壊したため、ゾンビはゆっくりと…崩れ落ちた。

吐き気がする…。

気持ちの悪い…。

感触…。

そして、尋常ではない…鉄の…血の匂い。

でも…おかしかった、湧也だけは…平然と見ていた。隣の美坂君は

…震えて動けていなかった。

ゾンビを倒した時の音に釣られて少数だけれど…全てゾンビの…人が歩いてくる。

「美咲…美坂…俺がやる…」

湧也は私の釘バットに持ち帰ると、ゆっくりとゾンビたちを…殺しに行った。

私の釘バットの方が威力が高いからなのだろうか…。金属バットは私の手にあつた。

美坂君は、少しづつ震えが止まってきているよう。

ミシヤ…

ミシヤ…

その音には、慣れなくなかった…人として。

気付くと美坂君に向かって一人のゾンビが歩いていた。

女性の…20代のゾンビだった。

「ああああ…」

おかしい。音は立ててはいない！でも…真っ直ぐ美坂君に向かって歩いている。

もしかして…ゾンビは…音だけじゃない私たち人間の居場所のとらえ方が…。

違う！今はこんな推察をしている場合じゃない！

「美坂君…ぞん…」

声が出ない…！嫌だ！気付いて……。

出て…よ…こんな所で怖気づいてなんか居られないもの！

「美坂君！ゾンビが！」

やっと出た声に美坂君は気付いた、私は足が竦んだままだけれど。震えてる。

分かってるんだ。

今何をしなくちゃならなくて、しないとどうなるか。

「やらなきや……死ぬんだ……うあああああああ！」

聞いた事のなかった叫び声。美坂君は、立ち上がり……ゾンビの頭に向けて、木刀を横に殴りつけた。

……また嫌な音。

それは、私たちの世界の終わりを表してたのかもしれない。
これからどうなるんだろう。

死にたく……無いなあ……。

湧也を見ると、周りのゾンビは全て居なくなっていた。血がべつとりと付いた釘バットを持って彼は笑っていた。

美坂君の叫び声も、これで関係なくなった。

落ち着いて、立ち上がる。

正面玄関から入って分かったのは色々な部署があった事。

天井から吊り下げられた看板に色んな部署が書いてあった。

「なあ、二人とも……ちよつと来てくれ」

湧也がいきなり私たちを呼び出した。彼の居た場所は捜査四課と呼ばれる場所だった。

捜査四課と言う場所は暴力団絡みで行われる事件での刑事事件を担当する場所のはず。

……本で見たただけだから。

「どうしたんだい……？」

美坂君は叫んで恐怖をどこかへ追いやったのか……平常に喋れていた。

「ゾンビだったんだけど……ほらよ」

そう言っただけで湧也は美坂君に何かを投げた、でも下から緩やかに投げたのでそれがなんなのか私には分かった。

銃だ。

私たちは、初めて…武器を…手に入れたんだ。

ゾンビと対等に…いや、むしろ有利に戦える武器を。

「これは…S & a m p ; W M 3 7 ! 弾も入ってるう〜」

…何この人。ニヤついてるなんてレベルじゃない。

「ウホホホ！M37について説明しようか！？」

…怖い…私は無意識に湧也の後ろに行き湧也の服の裾を掴んでいた。

「いや…別にいい…」

「そうか！良いんだ！じゃあ説明するね！」

…えっ。

「元々はM36って言う銃を日本が輸入したんだ、それをアルミフレームで加工したのがM37だよ。全長で159mm！ポケットにも入る小ささで重さは425gなんだ、重く見えるけどこれは実は銃の中では軽い方なんだよ。装填数は全部で5発だね。弾の種類は38口径なんだ。この38口径って言うのは特別で、他の銃と違って0mm×0mmって表記しないんだ。38口径って言うのはリボルバー式の銃だけの表記だね。あ！それと9mmだけは特別で、9mmパラベラムと、あと9mmルガーも同じ口径だよ。ま、銃の薬室にさえ入れれば9mmならだいたい使えるけどおー」

何この美坂君、怖い。

と言うより、引いた。

「よし！そこまでだ美坂！ガムテープもあつた！外行くぞ！外！」

湧也がここまでありがたいと思ったのは久しぶり。

「まだだよ……」

美坂君が目をキラリと光らせる。

「多分：銃器保管庫って言う警察の武器がある場所は多分全て持っていていかれてます。まず絶対に。銃の音はしてないですけどね、証拠品保管庫って言う：前にも言った場所に行きます。」
ふむふむ。

「そこは警察用の装備では無いので：本来警察は使えません、運が良ければ僕たちの物になります」

：一般人が知ってることは。知ってるはず。

「えーと、美坂」

「何だい」

「一般人の知ってる情報で良いな？」

「知ってるわけ無いだろう」

美坂君が入口の方まで走っていく、私たちはそれに促されるように付いていく。

「あつた、地図だよ」

湧也が少し顔をしかめると「書いてなくね？」何て当然のことを言う。

「書いてないに決まってるだろ、書いてあってもそんな所知ってどうすんだよ」

：。

「こつちだね、左側の方には何も書いてないし」
何で分かるかは考えない。

「二階は見なくていいのか？」

二階にもあるかも知れないのに。

「何言つてんさ、もしもの時のためにすぐに動けるように一階にあるに決まってるじゃないか」

何が決まってるの。

「二階のゾンビの弾は？」

ん、それは知りたい…仮に警察のゾンビが居るなら居るで銃弾や銃は欲しい。

でも美坂君の言う言葉は、何もかもを見据えていて「ゾンビをいちいち相手してらんないよ」と首をすくめて咳く。

私としては欲しいけれど…しょうがない、この辺に限っては美坂君に付いて行こう。

「あつたああああ！」

証拠品保管庫と書かれた名札が付いた扉を指差しながら美坂君は叫ぶ。

正直辞めてほしい。

「……はあ！？ドアノブついてないぞ！？」

湧也叫ぶな。

「つたりめえだろ！？一般人が開けて、銃乱射したらどうすんδει！？」

誰こいつら。

「えーとですね、この場合は…カードキーがあるはずなんですわー」
——本当だ。カードリーダーがドアに付いている。こんなの初めて見た。

「うううあああ」

声に反応してそちらの方向に振り向く、ちょうど入ってきた方向か

らだ。

服装は…警官。
でも違う。

普通と違う。

服は、S A T…つまり日本の特殊部隊…アメリカで言うS W A Tだ…。
ヘルメットをしている…前にもポリカーポネートの様な物で保護してあるから、銃も無理。
外の車…。
黒の…。

小声で湧也が美坂君の方を向いて喋る。

「（おい、ヘルメットした上に防弾服だ…対処法は？）」
「（…無い…M37を使えば良いかと思うけど相手はゾンビだ…頭はヘルメ…って！？美咲さん）」

もう良い。

今なら大丈夫、走っても良い。

ゾンビが遅く見える。

あの時と同じ。

手に持っている金属バットを前に投げる。

それに釣られるゾンビたち！行ける！

相手は三人…。多すぎるでしょう！

一人だけ離れているゾンビが居る！

こちらに反応した。

動きが遅い！

レグホルスターにある銃…。

映画でも見た、ドイツ社製の銃…たしかP220…。

反動は少ないはず、口径が9mmパラベラム…私でも使える。

装填数は9発+1…マガジン式で、薬室に入れるのを含める+1…
こつちをすでに向いているゾンビ。でも私の方が早い。

右手で、頭についているヘルメットを無理やり外す…固い！出来ない！テープで固定してある…片手じゃ無理。

焦る…どうすれば……そうだ、考えなくて良い！無理やり押し込めばいいんだから！

顎から押し込もうとするが入らない…関係ない！顎から脳天にぶち込むさ！

ダン！

…くっ…反動が腕に残る…、ゾンビは！？

…死んだ！9mmが貫通性が高くて助かった！

まだ二人居る！

銃声で完全にこちらを向いている。

ちょうど二人とも重なっている…。

行けるかな。

シュツ…。

スライディングをして二人の股を抜いた、私の体格だから出来ることだ。

すぐに立ち上がる、スライディングの音は聞こえなかったのかな？

ヘルメットの後ろも完全に封じられている。

首筋から滑り込ませて撃つ！

ダン！

まだだ、あと一人。

……あ。

拳銃特有の。

セーフティが。

拳銃には、特殊な状態で…今の自動式の銃に多い事なのだけど、トリガーが撃つても居ないのに撃った状態になり、上のスライドが引いたままの状態になる事をホールドオープンと言う。

これは弾の無くなった状態の時に起こるスライドストップと言う現象で起こるらしい。
詳しくは知らない。

さて、問題は…。

弾が無い事を教えてくれる機能。

「美咲！」

ああ…助かった。

湧也が釘バットを投げてゾンビに当てる。

それに応じて吹き飛ばすゾンビ。

吹き飛ばす前に私はそのゾンビのレッグホルスターから同じくP22
0を抜き取る。

冗談じゃない。

まだ死なないもの。

吹き飛ばすとするゾンビを傍らで見ている湧也たちを見据えて私は、
ゾンビを掴む。

そして… もう一発撃ちこんだ。
ダン！

疲れた。

腰が砕ける。

私が最後に殺したゾンビの胸ポケットから何が光っていた。
光沢のある板状の物。

カードキーだった。

「美咲！大丈夫か！」

湧也が駆け寄ってくれる。

… 血で濡れた服に… 血がべっとりとした手。

お風呂に入りたい。

「美咲さん…」

あ… そうだ… こんな化け物みたいな事しちゃって驚かしちゃったなあ。
あ。

中学校でもそうだった。

その時は、集団で暴行されそうになったんだよ。

男の生徒が4人に女の生徒が6人。

授業が終わって先生が消えた途端に立ち上がって…。

何がしたかったんだろう。

その時もこの状態に陥った。

正直殴られた方が良かった。

全員を返り討ちにしちゃって。

… それで… 誰も話しかけなくなった。
湧也を除いて。

今度は美坂君か…。

「凄すぎるじゃん！！うおーすげえ！アニメみたいだあ！」

私のクラスにもオタクが居れば…。

「何でこんな事が出来るんだい！？すごいいい」

湧也がとつさに美坂君の頭を小突いて「うるせえ」って声を掛けてくれる。

…心配したのは間違いだった。

カードキーを抜き取るとスキヤナーに上から下に向けて落とす。
ウィーン…ってぎこちない機械音を立てて、扉が横に開いた。

一歩踏み出すと、中はひんやりと冷たかった。

「美坂…落ち着けよ」

「無理だろ」

少し…笑えてきた。

笑えるなんて…すごい事なんだよね。私にしては。
感情の病気が…治ってきてると良いのだけれど。

「美坂君、これは？」

私は今も持っていたことに気付いたP220を渡す。

「ぬううううおおお」…うるさい。

「これは良いね、9mmは世界で最も使われてる弾丸だし、何より
使いやすい」

いきなりテンションが上がったり下がったり…忙しい人…。

「他の二人のP220も後で回収しよう」

無言で頷くと、何があるかを見始めた。

「おい、美坂」

湧也が声を発する方に顔を向けると、そこにはアタッシュケースがあった。

それは開いた状態。

中には、見たことの無い形状の銃が入っていた。

「これは…」

「こいつは確かF2000…という事かな…。こんなもんが日本あっちゃいけないんだけど」

F2000と呼ばれる銃は、どう考えても普通の銃には見えないし、何より…これを持ってきた人は日本で何をしようとしたのか…。

「ベルギーのFN社って言う有名な所が作った銃だね、口径は5.56×45弾…NATO弾とも呼ばれてる…多分今世界で一番使われてる銃だね。重さは3600g…けっこう軽くて使いやすいと思う。装弾数は30発でセミオートとフルオートに分かれてる…全長は694mmで、美咲さんでも使えるかも」

…。

「さて、ここは証拠品保管庫…これを持ってきた人間は何をしようとしたのかな…？本来ここは、ヤクザや外国から密輸してきた小型拳銃しか置いてないと思ったんですけどね」

私はまた武器を探し始めた。

冗談じゃない。

おかしい。

あの銃とこのゾンビ…何か関係あるのかな。

「これは俺が使わせてもらっよ」

「ああ、好きにしてくれ…でもセミだけにしてくれよ？」

「何でだ？」

「銃を撃つたことの無い初心者にフルオートを使われても、弾の無

駄だ」

「お前は撃ったことあんのか？」

「40回ぐらい」

「すいません、隊長」

「それでよし」

… あった！つい笑みがこぼれる。

でも、こんな事で喜ぶなんて… そう思うと笑いは自然に薄れていった。

「美坂君」

また無表情で、人を呼ぶ。

右手には銃を持って、前に差し出す。

「… やりい… グロック17Lじゃん」

グロック17は聞いた事がある。

「Lと普通のは何が違うの？」

そう言うとは彼は得意そうに言って「銃のバレルが長いんですよ、だから命中率が良くて… それに音や反動も少し減ります」

良い事づくめ？

「… ん… でも重くなるんですね、17が620gでLは670gなんです… それにバレルが長いからバランスが少し悪いし」

… ふむ。

「それは美咲さんが使ってください、9mmですし… 何か武器は持っていて欲しいですから」

そう言うとは彼は違う方を探しに行った。

「四葉ー、君はそれとP220で十分だ、外の警戒と武器を探しに行ってくれ… あ！殺すのは出来るだけバットでな」

「ああ、F2000の予備弾倉は4個あったけど… ポケットに突っこんだままで良いかな？」

「タクティカルベストやポーチが無いんだ、しょうがないよ… 今度

探そう」

「ああ」

無い。

武器がない。

そう思うと後ろで「おおおおお！！マカロフ！！」

私は、もう疲れたし…特に武器もなさそうだし美坂君の方に寄った。

「美坂君…もう武器はなさそう…」

「ん、そうですね…F2000があっただけでも儲けもんですしね
私の銃の予備弾倉は3個、調子に乗って使えば即刻消えてしまうだ
ろう。」

「あ、そうだ…四葉を忘れたままですね」

「うん」

会話が続かない…。

そんな事を気にしながら部屋から出ると湧也が笑顔で待ち構えてい
た。

「美坂！あの三人の装備だ！階段に落ちてたよ」

…楽しそう。

「なんだい？」

「89式だ」

聞いた事はある。

「おお、口径は5.56mm×45…NATO弾だし重さは350
0g…良いな！装填数は30…僕たち完全な武装だよ！」

「三丁あるが？」

「一丁だけ僕が使っよ、他のは弾だけ取ってて…四葉のF2000
と弾が互換できるし」

「分かった、美坂も手伝ってくれ…美咲は周りも警戒してくれ」
…。

あ…れ…？

おかしいな…。

89式はSATも少しだけど持つてゐるって聞いた。

問題はP220。

あれ…は…自衛隊装備。

おかしい。

…私の間違いかもしれない…良い、美坂君ほど知らないんだから。
気にしなくて良い。

「美咲、行こうぜ」

…後ろから湧也に声をかけられた。

「どこに？」

「俺的には腹が減ったなあ」

…能天気。

「あ、そうじゃん、近くにスーパーあるわ」
そう言えばそうだ。

…すでに誰か居そうだけど。

いざとなれば…銃……！

私は、ゾンビじゃなくて今度は人を殺めるの？

第七話：武器…美坂君…落ち着いて。（後書き）

人によっては武器の詳細が違っていると思いますが、そこはご勘弁を。

スーパ―か…。

みんな武器防具を晒します。

鳴宮 美咲

主要武器 グロック17L 予備弾倉…3個

副主要武器 P220 予備弾倉…2個

四葉 湧也

主要武器 F2000 予備弾倉…4個

副主要武器 P220 予備弾倉…1個

美坂 滝也

主要武器 89式小銃 予備弾倉…6個

副主要武器 マカロフ 予備弾倉…無し

副副主要武器 M37 予備弾…無し

以上になります。さてと…黒車の武器いらなくね？

第八話：普通の人と私は何が違う？（前書き）

けっこう実話入ってます。

詳しくは言えないことだらけですけど、調べれば出るんですけどね。

第八話：普通の人と私は何が違う？

武器を手に入れた。

やる事は無くなった。

次の目標を決めなくてはいけない。
ない。

無かった。

目標は、生き残る事しか見つからなかった。

でも、それで良いはず。

生き残って…。

生き残って…。

どうするの？

「美坂、スーパーで何を取れば良いんだろうな？」

「うーん…まずスーパー自体が防御になるし…だいたい食料しか頭に思いつかないよ」

私たちは黒い車……ワゴン車にしか見えないが、それに比べると長くて大きい車にガムテープを貼る。

湧也がガムテープを貼った車の窓の場所…そこに向かって肘を向け

る。

「なあ、美坂…これって割った瞬間にサイレン鳴ったりしない？」

湧也が心配そうに美坂君に話す、防犯用のサイレンが鳴れば中々楽しい事になるじゃないだろうか？

「分かんないけれど、車のドアを触っても鳴らないし防犯はドアの鍵穴を弄ったら鳴るのかなあ？」

「まあ良いんじゃないんだろうか、今の武器だけでもかなり重たいし無くても良いかもしれない。」

さつきまで私が向けていた美坂君から湧也に顔を向けると湧也はすでに割る直前の体制になっていた。

ゴツッ…。

割れない。

まあ、当然だけど…防弾にするよね。普通。

「……ううがあああ…いてえ…指先にまで電撃が走った…」
それは痛い。

湧也が窓を割ろうとした右腕の肘を左手で押さえていると。

「うーん、何となくそんな気はしてたけれど…」

湧也が肘を押さえながら美坂君をキッと睨むと「ふざけんな、今度仕返しする、絶対に撃ってやる」と言う。

正直やめろ。

「んー、欲しいな…」

そこまで欲しがらなくても…私たちにはもう十分な武器がある。

「美坂君、何でそこまでして欲しがくの…？」

私が聞くと美坂君は鼻をフンと得意げに立たせて「とりあえず……
こう言う軍事車両には弾があります。もちろん持ってきた武器の弾
以外には何も無いと思うんですけれど……」……キリが悪い。何か考
えてる？

彼が口ずさんだのは、どこまでも冷静で……かつとても必要な情報だ
った。

「無線があるかもしれませんが、それでどこで救助活動しているか、
トランシーバーの類は無いか。それとこのゾンビ騒ぎに馬鹿な政府
が持つてくる武器……ゾンビに有効な武器ならサイレンサー……つまり、
完全な消音器なんです。もちろん音はなりますが近接の武器の類と
は変わりない程度の音かと思われます。僕らが適当に探してもサイ
レンサーなんて高級……まずありません、代わりにサプレッサーと
言う減音器が多いんですね」

これは……。

無線……そして対ゾンビとして銃の中でもかなり有効な……。

この世界で戦争がある。そして戦車が出るとする。

たとえ同じ威力の無反動対戦車砲……つまりゲームで言うロケットラ
ンチャーみたいな物だが……。

弾丸に追尾機能が付いていれば、付いていない物に比べてとても優
秀ではないだろうか。

無線は聞きたい。

もしかしたら救助があるかもしれない。

「おい、つまり何だ…これを開ける馬鹿野郎って言ってるのか？」
湧也が腑抜けた声で美坂君に言う。

でも言われた美坂君は何も示さない…。

湧也が地面に置いておいた銃を取る。

それはF2000と言う武器だった。

5.56mm NATO弾…貫通する…？

「無理だね、防弾だよ？7.62mmなら悩み所だけど…日本も使う口径だ…」

…むう。

「……成功するか分からないけれど……あるよ？方法」

さすが。

「どんなのだ」

「簡単さ」

「勿体ぶるな」

「銃の弾丸をバラして、弾に火薬を詰めなおせばいい」

「はあ…？無理だろ？金属製の弾丸だぞ？散弾銃のショットシェルみたいな紙製とかならまだしも」

「だから専用の機械が必要なのだ…でも銃が壊れる可能性があっても良いなら大丈夫だね」

「89式でやれ、あれなら銃の替えがある」

「分かってるさ、ちよつと取ってくるよ釘バットで周りを…やれるなら掃除しておいてくれ」

「ああ、火薬の量を増やすんだ、舐めてると周りのゾンビ全部寄ってくるしな」

なあに？このお兄さん…こわあい。

「美咲…待っててくれ」

そう言う湧也は群れではないゾンビに寄っていく。持っているものは釘バットだけ。

それを見ながら警察署を向くと今度は美坂君が左側…つまり証拠品保管庫が会った場所に向かっていった。当然そちら側に銃の落ちていた階段がある…その場所に向かったと予測できる。

ボーっとする。もちろん周りには気を使う。

私たち…何をやってるんだろう。

たった一晩で武器を手に入れ…今度はそれをさらに大きく、強くしようとしている。

もう夕暮れだ。早くしないと危険。スーパーに行つて…。

「やあ、来たよ、ペンチと他にも色々あるけどこんなもんで良いよね」

「おう、89式を何で二個も？」

「こんな無茶な事プロ以外やらないよ、失敗すれば火薬だよ？死亡さ」

怖いなこの人たち、あ、色々やってる。私の口では説明できないと

いづか説明できないように口が動く。

「出来たぜ、さあやろうぜ四葉」

「OKだ隊長、撃て」

「四葉が撃て、こんな反動がどうなってるか分からない銃ほど触りたくないものは無いぜ」

そう言つと湧也が銃のストックを肩に当て右頬をストックの根元に下げる。

引き金に指が行き、ゆっくりと指を引く。

ダゴオン！

……えつ。

成功してるのは良いけれど音がおかしい。

89式が薬莖を出さずに先端から煙をずつと吹いている。

成功したガラスは当たった所からヒビが周囲に走っている。

それと湧也は顔を歪めていて、右肩を押さえているが、そこまで酷くはなさそうだった。

美坂君が自分の元々持っていた89式を持つとストックの部分で割れた部分に思いきり殴りつける。

ガシャア…。

「四葉が中に入って外にドアを開けてくれ、そのあとすぐに物を持つていくよ」

そう言つた美坂君の後ろには大きな台車があつた。

「……ううううががああ……誰だ、この馬鹿な銃撃てよって言つた奴…恨むぞ。あ、美坂は？」

「僕は、この今銃本体に付いているマガジン含めて7箱を使うさ、ゾンビの量がシャレにならないだろうしね」

私は、落ちていた壊れていない89式を持つ。

「美坂君、マガジンを二つ」

真っ直ぐ見つめる。

私も役に立ちたい、武器を使いたい。

…、武器を…使いたい…？

「でも、5・56mm弾なんて銃を撃ったことの無い素人じゃ…あ
っ！」

奪い取る。

もう、良いの。

何でか分からないのに。

銃を撃ちたい。

敵を殺したい。

それが私の脳内を駆け巡る。

まるで、それが私に出題された任務のように。

指を引き金に掛ける。

周り居るゾンビを数えると40人程度。

銃のセレクトをフルオートからセミオートに切り替える。
撃ち方 連発 単発

狙う、撃つ。

その単純作業を繰り返す。

タァン！

タァン！

タァン！

タァン！

タァン！

どれほど時間が経過しただろうか…。
もう目標はない。

弾は二箱目に行つてあと10発程度…。

ほぼ外していないとも言える。

そして、問題が…。

美坂君は手伝っていない。

私が撃つのをずっと眺めていただけ。

これは…私がおかしいよね。

「美坂…武器は無い… M26破片手榴弾が12個あったぜ、持つてくぜ」

「…」

無言だ。

「銃の弾はたくさんあったぜ、もう台車に積んである、暗くなる前に行くぞ」

まだ無言。

湧也はおかしく思わない。これはおかしいのかな。

ねえ、銃って簡単に扱えるの？私って。

何なの？

第九話：やっと中に入る。……まあ、予想はしてたけれど、ひどい。

歩いて行く。ただ真っ直ぐ。

歩いて行く。何も考えず。

目的地に向かう。ただ真っ直ぐ。

目的地に向かう。何も考えず。

スーパーまでの道のりは、とんでもなく楽だった。

何故かは分からない……でもまったく居なかった。

ゾンビが居ない。

おかしい、と思う。

でも……スーパーに到着すると、なぜゾンビが居なかったのか道のりがとんでもなく楽だったのが分かった。

「——いくら何でもこれは無いだろ……おい……」

湧也の発した言葉に、賛成だ。

目の前にあるスーパー『アルト』に続く道路には、車が大量に道を封鎖していた。

坂で出来た道路がある、そこに『アルト』が坂で出来た道路の横にある……大きさは結構な大きさだ。

俗に言う……業務用スーパーと呼ばれる所。

その私有地である駐車場を通らなければ店には入れない。だがその駐車場事態を大量の車が封鎖していた。

ここまでは別に良い、むしろバリケードの役目をしていて良いのだからうけれど…。

「四葉、こんなのがちゃんと出来てるって事は今も人が中に居て、多分リーダー的存在が居るって事で良いのか？」

美坂君は、あれから歩いている途中で復活とでも言えるのか、普通に喋った。

私には、少しだけ怒った。

言った言葉は「戦いたいなら、そう言ってください…僕も男女差別はする気はありませんし、でも気を付けてください…死んでもらうと、困るんですよ」と、微笑みながら言ってくれた。

彼はとても心が広いと思う、中学校の時とは違う。

「ああ、俺らを拒んで…食料を分け与えてくれなければ殺しても良いだろ」

あれ…？

「…っ！湧也…殺すなんて…っ！」

今の言葉は聞き捨て何て出来やしない！人は対応力、順応力が高いって言ったって…今のはおかしい！

「美坂、俺何かおかしかったか？」

平然と言ったのけた彼の顔は、いつも同じ顔だった。

「おかしくは無いが…殺すのは落ち着けよ、銃の弾だって無限にある訳じゃないんだ」

あれ…？

美坂君もそうだ…殺すのに否定をしていない！

何で…？

私がおかしいの？

私…が…？

「ま、どうせ入れなかったら意味ないけどね」

……もう良い、今の事は考えない、目の前の事に集中しなくては。店の前ではバリケードが重ねられている、そして店に入るためにある駐車場からの道は車で封鎖してある。それまでは良いけれど……問題はこの先……。

どうせ車でバリケードを作るときもエンジンを掛けて音を立てまくったんでしょう……。

何台もの車には、数えきれない程のゾンビが纏わりついていて。少数のゾンビは車を登っていた。

ゾンビはスーパーの中には入れなかったが。

……スーパーの物で組んだからか、バリケードは弱そう……。

段ボールや、スーパーの籠《かご》……それにカートでバリケード作ってある上に、扉は自動で開かないように、棒で止めてある。

「湧也、どうやって入る？」

「二階の駐車場に上がって、エレベーターから入る……ここの構造をそこまで知ってなくて、馬鹿だと良いんだがなあ」

もし、封鎖してあればどうしようもない。

「じゃあ行こうか、四葉……美咲さん」

相槌を打ちながら、ゾンビを避けて二階の駐車場に向かう坂を上る。着いたその先はゾンビも居ない静かな物だった。

「おい、あー……バリケードがエレベーターの場所には付いていないな、階段は付いてるけど」

この事からここのリーダー的存在が大分、頭が良い事が分かる。

「エレベーターを使うゾンビなんか居ないしね」

私たちはエレベーターに近づくと、後ろで物音がした事に気づき振り向く。

居たのはゾンビだった。

音は立てていないと信じたのに。

「急げ！」

湧也の声と同時に私がエレベーターのボタンを押す。

「美坂！撃っていいか！？ちょうど、撃ち試もしたいんだ」

ふうむ、いざって時に撃てないのもあれだから撃ち試もした方が
良いのかもしれない。

「馬鹿か！撃ってみろ！これから入るスーパ―から追い出されるだ
ろ！」

「ハハン？知った事じゃない」

「とりあえず死ね！」

二人はとりあえず喋るのをやめて落ち着けば良いと思う。

どちらにしても、まだ20mは離れているのだから、エレベーター
の方が早いと思う。

「二人とも、エレベーター……来た」

でも二人はまだ話している。あんまり焦ってないように見えるけど。

……、聞こえてない。

とりあえず、エレベーターに乗り込む。

「さようなら」

そう言って私は、エレベーターの「閉」と書かれたボタンを押す。
横から出てくるドアを見ながら完全に閉まるのを確認する。

そして「開」と言うボタンを押す。

開けた瞬間に見える二人の顔はこちらを向いた状態でとても怖かつ
た。

「悪かった」

「すいません」

二人の謝罪が聞こえると共に二人は、エレベーターに入ってきた。

……エレベーターの降りる感覚は、何とも言えない感覚がある。

普段どうでも良い事だけれど……いざ、こうしてみると凄く変な感じ
がする。

一階に着き、ドアが開くとそこはバリケードを貼られた場所が目の前に現れた。

エレベーターから出て、右側を見るとそこにスーパーのドアがあった。

「入ろうぜ」

湧也の言葉と共に中に入ると、一人の男が居た。

私たちを見た瞬間に、カタカタと震えだしてどこかに走り出したかと思うと。

「ゾンビだ！ゾンビが入ってきたあー！！」

……厄介事が増えそう……。まあ、そう思うのも無理はないけれども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330u/>

君は人で、私は人？

2011年10月9日04時55分発行